

内

金巻分也 丑四月廿日渡ス

米巻俵也 丑五月廿八日渡ス

代金巻分六百文

米巻俵也 丑七月二日渡ス

代金巻分六百文

メ金三分ト巻メ式百文

引残而金式刃ト四百文

右ノ分 取直ス也

尤左内おかめとの礼之儀は

当丑極月大晦日可致候

(裏表紙)

上紙共二五拾式枚

五八 書簡(紅花代金為替手形下しに付)

(端裏書)

「やサマ

」

二啓申上候、旧冬中ハ万端御都合克御取納可被遊珍重御儀奉存候、次ニ当方御蔭を以相応ニ御取仕舞仕候 乍憚御休意可被成下候、一昨年中ハ御差荷被成下難有仕合ニ奉存候、右売付旧冬申上候所相達御拜見御承知被遊候由、右代金此度山形十日町村井清七様へ為替ニ取組手形相下し申上候、則左ニ

金四拾式両三步ト

六匁九分也

右之通手形江下し申上候、右同人様方引替御受取被遊可被下候、尤仕切書ハ旧冬相下し申上候御一覽被遊被下候由奉察入候、爰元旧冬中取引之儀外々方も申参り御承知被遊候由、昨年中諸方荷不足ニ而是非一花面白キ取引可

有之哉存居候所、何分諸方不景氣ニ而、紅屋方染註文無之、例年の半高後々仕事も致不申、依而残花も相応ニ有之申候、当年諸方又々荷不足之様相聞入申候、何卒此後都合克上出来仕ハ反御利運相成り候様奉祈上候、不相替御仕入御差向被成下度偏ニ〳〵奉願上候、先ッ者申上度如斯御座候、恐惶謹言

(文政十四年カ)
正月四日

近江屋佐助[㊦]

伊助

喜助

万助

堀米四郎兵衛様

御店衆中様

五九 書簡 (京都より手形入に付)

(封書上書)

〔沢はた

貫津

堀米四郎兵衛様 赤塚庄次郎

貴下

未夕不得御意候得共春

寒迫兼日候、御家内様

御壮氣被成御越年珍重

之御義ニ奉存候、然者昨日

京都近江屋佐助殿と

手形入之書状到来

候ニ付、差遣申候、御入手

可被下候、則乍御面倒

御請取被遣可被申候、早々

以上

(文政十四カ)

二月十二日

尚々申上候、賃銭

式百文此ものニ被下度

奉存候、右賃ニ而者

少々余慶与奉存候得共

御勘弁被下度奉存候

六〇 書簡 (注文品船積他に付)

(封書上書)

「羽州最上谷地沢畑

堀米四郎兵衛様

為替手形入」

(封書裏書)

「二月十二日出

近江屋

安次郎」

(端裏書)
「や御印様

(異筆)
山形山村藤八殿と

三月晦日八ツ時着」

一筆啓上仕候、春暖相催候処、先以其御地御家内様御揃
益御勇健ニ被遊御座奉存珍重候、随而当方無異罷有候、
乍憚御安意思召可被下候

一、猶其御表正月二日出候御状、京都伊勢屋理右工門殿
と相達し忝拜見仕候、然ハ旧冬才三郎様御上京之儀、其
後喜内様三吉様御上京之儀ニ付、御叮嚀御礼御書状被下
奉痛入候、誠ニ喜内様三吉様之儀ハ、当地御逗留も無御
座御出立ニ付、大キニ残念ニ奉存候、乍憚宜しく御断申
上候

一、才三郎様御註文之品、早々御下し可被成候様被仰下
忝奉長候、則先状と追々上船候御ツミ入申上度罷有候、
此度別紙船付書御案内申上候、御入手可被成候、且又絞
リ木綿両三日中ニツミ入申上候間 請入次第二仕切書御
案内可申上候

一、猶爰許正月廿四日出候くり綿船付天草仕切書御案内
申上候、定而相達候御被見可被下候、追々入津之節御引

分訂被下候

一、昨年古手御註文被成下候ニ付、右代金当夏紅花ニ而御為替被下候様御引合之趣御尤ニ候へとも、皆済右花代ニて御済被成候様ニてハ、下店ニても困入申候ニ付、半金御渡し被下候而、半金新花ニ而御返済被下候様、才三郎様ニ御相談仕候、亦右御承知被下、旧冬中金五拾兩伊勢利殿も受取申上候、亦此度御状之趣ニてハ、右手仕切金ハ当夏新花ニ而御為登被下候様、右正金之儀ハ早々御下し可申上候様いさゝるニ被仰下承知仕候、早速正金ニて差出し可申候処、幸ひ東根江為替金有之候間、右金為替取組可被成候、左候ハ、下候實も無益ニ相成可申候間、則左之通

一、金五拾兩也

東根早坂徳兵衛殿

二月晦日切 手形書通

右之通手形書通差下し候間、早速御引合被下二月晦日御請取可被下候、尤同人様も別紙書状ヲ以右為替金之儀申遣し候間、此状書通早々御達可被下候、若又右同人様手

形を以右金不殘相揃ひ不申候節ハ、四五日中ハ御待被下候而御受取可被下候、尤二月晦日も格別ニ延引仕候ハ、日割申分利足御受取可被下候、少々延引者可然御掛合可被成候、下店もいさゝる訳合申遣し候間、早速ニ相渡り可申候へとも、萬々一都合被成候迄兩三日中之所可然御用捨可被成候、此段くれぐれ奉願上候

一、右金利足金之儀、則下店も左之通追而勘定可仕候

一、金拾兩也

午十二月朔日

未正月晦日まで

メ二ヶ月分七朱也

右之通利足御勘定申上候、兼而才三郎様へ御引合申上候通、追而さし引書相出し可申候、御店様之御帳合も御控置可被成候、若哉東根も最早登り金被成候ハ、跡辺ニも相成申上候、直様正金相下し可申上候、此段御安心可被下候

一、此度古手式箇御注文被下忝奉存候、さて相働最上向キ御積入可申上候、其外御預り金之儀廻し御案内申上

置候間、追而差引書ニ相認メ可申候、此段御案心可被下候

一、紅染下地出雲白木綿七拾反御注文被下候処、当年くり綿高直ニ付、木綿至而高直、別而出雲割合大不好御座候処、御差直之五匁五六分ち七八分高ハ無之候、いづれも六匁位ち下直ニ而ハ無置候間、出雲は見合紅染下地ニ宜しき木綿外ニ六拾反御つミ入申上候、是ハ割合利好ニ御座候間、其地着御見分可被成候

一、当地くり綿之儀、旧冬ち式參百匁かた引入申候、才三郎様御買入被成候直段ニ而ハ、之節出来不申、當時国々ニ而五メ式百匁位ニ御座候間、其思召ニ而御商内可被成候、未々引メ而可申候間下直ならハ御見合御待可被成候、至而右荷無御座候間追而引立可被成候、以上

一、当地紅花之儀、当春ニ相成差而相変不申、同様之姿ニ御座候処、此節ニ而ハ江戸廻し廻候て入津仕、旧冬ちハ壹式両かたも引後取引仕候、此段右様思召可被成候、何卒一花引入り可申様仕度候へとも、春ニ承ニ而

相違少々差引下り申候段大キニ困入申候、御勘弁可被成候、貴川着候段御請状申上度早々如此ニ御座候、恐惶謹言

近江屋

(文政十四年カ)
二月十二日

安治郎印

源円

伊八

堀米四郎兵衛様

御店中様

六一一 書簡 (紅花代金勘定に付)

(端裏書)
「伊勢理殿」

末ノ紅花

利国
一拾八袋入 六丸卜拾六袋

未十一月晦日切四拾兩替

此金七拾七兩貳朱也

同さし花貳袋也

未十一月晦日切三拾貳兩替

此金壹兩也

金七拾八兩貳朱也

内

金五拾匁也

未十二月四日御出し

同廿七日着

又金貳拾兩也

申正月五日御出山形佐治吉左衛門殿に

申二月六日受取

此分未十二月壹ヶ月分利足御勘定無之候

残り

金八兩貳朱也

申十二月五日去新花代金入合

綿勇殿ニ相渡ル

此分未十二月分置入

申之十一月迄に十三ヶ月利足

御勘定無之候也

右之通り去未に暮之

惣仕切差引書ニ相見

不申候間、上方之仕切

扣御札、右二口利足

御受取被下候、猶委細

之儀者、使人江申合

遣し申候間、左様候へ者被下候、何角御世話

之段千万不淺忝

奉存候、随分御道中共

御大切ニ被遊、御帰国之砌

万々目出度得貴意御礼旁可申上候、

恐惶謹言

(文政八年)

三月廿五日

六一―二 御心得書

〔吉川 沢畑村

松田源右衛門様 堀米四郎兵衛

用書

御心得書

一、柴宗殿漬杯与申立分散等願出候ハ、御同人も当春
差下し申候偽り書面ヲ以メ付、猶又綿勇殿方ニ而ハ、右
ノ書面ニ付甚タ迷惑之筋ヲ以、綿勇殿方も御懸合之程御
願可申上候、左候へハ柴宗も甚タ綿勇方江及迷惑ニ可申
哉与愚案仕候、敵敷御懸合御片付御下り被下度奉願上候、
右心得之ため如此御座候、早々頓首

四日

堀四

松田源右衛門様

六一―三 書簡(紅花仕切殘金に付)

(端裏書)

一昨日者御念之御入忝奉存候、弥当廿七日御登之由被仰
聞早速以參御見舞可申上善之処、何様にも内外取込參上
仕兼背本意候段、真平御尊免被下候、然者上方用向筋御
頼申上候趣意ハ、柴崎宗右衛門殿紅花仕切殘金式拾両、
去暮中迄ニ綿屋勇藏殿方江相渡候、則御同人も差下し可
申積りニ、支配人三吉右兩人江取渡り、則綿勇殿も受取
書付申受罷下り候処、其後柴崎宗右衛門殿も三吉方江正
月二十一日出二書状罷下り被見仕候所、弥々柴宗方も綿
勇方ニ去暮中無相違相渡し候趣申参り候処、綿勇も二月
二日御出貴札ニ者、去暮中柴宗方江催促仕候得共手詰り
之趣ヲ以相渡不申由、依之私之方も嚴重懸合可被成様ニ
申参り候、左候得ハ柴宗殿不得之様ニ相見江申候間、綿
勇殿同道ニ而柴宗方江御懸合御受取可被下候、若出来不
申候ハ、町奉行所江綿勇殿相談之上御出訴被成下、右大

謀計之書状ヲ以御懸合可然哉ニ奉存候、何分綿勇殿相談之上御懸合可被成候、則綿勇柴宗伊勢利三人江差状差遣し申候間左様思召可被下候、猶又伊勢利用向左ニ

(以下切レ)

六二 書簡 (酒田湊入津通知並びに相場書)

(封書上書)

「谷地沢畑

掘米四郎兵衛様

本間幸四郎

要用書

「(封書裏書)

酒田と

幸便一筆啓上仕候、追日暖和二相成候得共、御家内様弥々御勇健可被遊御座奉珍賀候、此度上方と下り御荷物差向

被成下千萬忝奉存候、則着仕候分左ニ

や 操綿 三本

同 天草 貳本

や 宮丸兵藏舟

や 操綿 三本

や 玉出丸富五郎舟

や 操綿 三本

や 日吉丸宗助舟

や 同 三本

や 宝来屋庄右エ門舟

や 天草 三本

や 正宝丸平左エ門舟

右之通無事着仕候間、御安意可被遊候、尚又此節積舟其御地御城米積登候間、右船下り次第ニ為積登可申候間、左様ニ御思召可被下候、右御案内旁申上度、早々御免可申下候、尚期近々可申上候、恐惶謹言

本間幸四郎印

三月十八日

堀米四郎兵衛様

相場

一、御米札
当月切

〇合
三十式匁半位

三十式匁七分より
三匁也

一、作徳米

三十三匁半位

一、最上大豆

五十三分

一、同小つ

一石七斗五升

一、同なたね

一石三斗五升

一、玉砂糖

五十一、二斤

一、塩

六石四斗

一、銭両かへ

六メ七百文

六三一 一 書簡 (紅花代残金渡しに付)

一筆啓上仕候、春暖之砌弥其御地御家内様御揃御勇健ニ可被遊御座珍重之御儀奉存候、隨而当方茂無別条罷有申候、乍憚貴意易御思召可被下候、然者当地と二月十二日出しをもつていさへ申上候得者、無相違相達し御披見御承知可被下候与忝奉存候、然ル所御地と二月二日御出し之貴札相達し、御納書之趣忝拝見仕候所、柴崎屋宗右衛門殿と去暮迄ニ可相渡金子、御手詰之趣ヲ以相渡シ不申候ニ付、其趣柴惣殿江御懸合可申段御納書ニ被仰聞、何角千万忝奉存候、然ル所御同人様と正月廿一日出し之貴札、大場三吉方江相達し披見仕候所、紅花代残金不残去暮中貴家様江相渡シ候間、定而其趣貴家様と御案内可有之趣御納書被仰聞候、如何之行違ニ御座候哉相訳り兼候間、此度松田源衛門為差登申候、宜敷御思召可被下候、万一柴宗殿と今以テ貴家様江相渡シ不申候得者、何ヶ御尊公江ご迷惑ヲ相懸度、偽り謀計り取工候事与奉存候、

依之柴宗殿方之御出状為持差遣シ申候間、又々乍御苦勞

様源衛門御同道ニ而、右之書面ニ付、柴方を御尊公ヲ相
手取候趣ヲ以て、御懸合被下置候ハ、早速相訳り可申
候、則相訳り申候ハ、乍御面倒綿屋飛脚ヲ以て御差下
し被下度奉願上候、何連源工門御差凶次第偏ニ与願上候、
万一早速相渡シ不申候ハ、源工門方ニ御加力ヲ御差か
へ、町村役人江出訴可仕様申合為差登候間、何分御勘弁
之上早速相訳り候様御加力之程偏ニ願上候、乍末筆大場
三吉も宜敷御礼可被仰上管左様申事候、先何様右御頼旁
以愚札如此御座候、恐々謹言

三月二十七日

堀米四郎兵衛

綿屋勇藏様

同 御店中様

六三一 書簡（紅花代殘金渡しに付）

柴崎屋惣右衛門江手紙控

一筆啓上仕候、春暖之御弥御地御家内様御揃御勇健ニ
可被遊御座珍重之御儀奉存候、隨而当方無別条罷有申
候、乍憚貴意思召可被下候、然所御地方正月廿一日
御出し貴札相達拝見仕候、然ル所紅花代殘金去暮中綿
屋勇藏殿江不殘御渡シ被成下候間、御同人様を御案内
可被參申趣大場三吉殿方江被仰越候処、綿屋勇藏殿を
二月二日御出之貴札達披見仕候所、去暮中貴家様を金
子御渡不申候段申參り、如何之訳ニ而御渡し不申候哉、
其正月廿一日御出シ貴札ニ者去暮中綿屋殿江不殘相渡
し候所、大場三吉方江の御書面何共相訳り兼申候間、
此度松田源工門差のほせ申候間、綿勇殿江急度御懸合
早々差下し可申様奉頼入候、右申上度御願旁急札如此
御座候、恐惶謹言

三月廿七日

堀米四郎兵衛

柴嶋惣右衛門様

御店中様

六三十三 書簡(追伸)

(尚々書)

「外ニ申上候、上方より書状上方江御持参御懸合可申候」

追々申上候、御心得のため上方諸書無封じニ而差遣、御覧ニ入申候間、則御覧之上封じ被遊、御持参被下度は又奉願上候、諸事御考弁無御油断偏ニ奉願上候、早々謹言

八日

印様

や

六四 書簡(紅花値段下落に付)

(封書上書)

「羽州最上沢畑

堀米四郎兵衛様

伊勢 源助

(朱印)

要用

「早便」

(封書裏書)

「四月五日出

京都

嶋屋便を以一筆啓上仕候、追々向暑ニ相成候処、其御地御全家様御勇健ニ可被遊御座喜悅之至ニ奉存候、当方無異儀罷有、乍憚御安慮可被成下候、然者当地より三月廿二日出を以、御印紅華入船仕候趣申上候相達、御披見可被成下奉存候、尤其後御飛脚無難ニ上着仕相改蔵入仕候、御安氣可被成下候、尤売方之儀者売渡無如才相働候得ども、何分不相手ニ而買人無之殆々困り入罷有候、勿論此節之処相手次第御売附仕候とも、迎も

貴下

直段之処思召ニ相付申間敷与大二心配仕候、何分此後之処無油断相働、宜買人も御座候ハ、相成丈出情可仕候、宜御承引可被成下候

一、爰許紅華之儀、先書ニも申上候通り、早春以来之所紅渡物大不揃ニ相成、追々直段計下ケ一向引合ニ相成不申候趣ニ而、紅渡方一円出来不申候間、紅華潰連荷物至而無少、此節ニ至りいまだ眩々と取引無之候故追々氣配不宜、殊ニ残年之殘荷何程も相揃不申候処へ、春上り荷追々上着ニ相成、弥以氣配不宣候間、既ニ去冬相庭方七八商品ニ拾両方も下落ニ相成、扱々困り入候年柄ニ御座候、尤此後之処如何成行可申候哉難計、何卒新花萬一華賑々敷立候様奉祈上候、先者右御断旁々申上度如此御座候、尚期後便時候也、恐惶謹言

伊勢屋源助

四月十五日

孫八

金七

貞七

堀米四郎兵衛様

六五 紅花引当金借用証文

引当金借用証文之事

一、金三拾兩也 但し御吹替判ニ而

此引当紅花六拾四袋 但し正味五百匁入

右者此度御上納金ニ差詰り、其訳貴殿江達而御願申入、右引当之紅花六拾四袋櫃西村宇兵衛蔵ニ積立、書面之金子三拾兩只今儘ニ請取借用仕、御蔵方御上納所実正ニ御座候、尤返済之儀者、来卯三月限月壹割式分五厘之利足金差加へ、元利急度返済可申候、万一右限月迄ニ返済成兼候ハ、前書引当之紅花、貴殿方ニ而御勝手次第御壳拂可被成候、縱令其内引当之紅花、火盜其外如何様之諸難出来候共、拙者方ニ而勝手之筋を以櫃西村宇兵衛蔵

二積立置、右金借用申上者、貴殿江少茂御苦勞御損之筋
毛頭相懸申間敷候、為後證引当金借用加判證文、依而如
件

文政十三寅年八月□日 寒河江樋西村

金子借用人

名主 治右衛門

同村

右紅花預り人

宇兵衛

同村口入人

市郎兵衛

沢畑村

四郎兵衛殿

六六一 書簡（紅花作付狀況に付）

〔封書上書〕

〔羽州最上谷地澤畑

〔封書裏書〕
五月十二日

堀米四郎兵衛様

近江屋

安治郎

〔端裏書〕
「や、サマ」

端午之御祝義目出度申納候、向照之砌御坐候へ共、先以
其地御家内様御揃、御壯健ニ可被遊御座珍重之御儀ニ奉
存候、次ニ御店無異儀罷有候間、乍憚御安意可被下候
一、其地紅花追々成長可仕候様奉存候、何卒此後無難上
出来仕候様奉祈上候、扱当地之儀元来□印之所近国西
国すじ時付多く、仍而紅花見込よわく、尤先月下旬方
能てり込申候間、右庭所私早庭等照なとも可相成欵と
双方危口口眠合罷有候所、節句頃方折々好雨御座候間、

何連近々品物善悪相分申候へ者、一一高下可仕与奉存候、猶新花御荷物不相変沢山御差向可被下候、急度出情早壳御仕切可申上候、先者右出荷御頼申上度取込早々如意御坐候、恐々謹言

五月十二日

近江屋

安治郎^印

源兵衛

伊兵衛

堀米四郎兵衛様

貴下

六六一二 書簡 (為替金不渡り他に付)

(端裏書)

「ヤサマ」

副啓仕候、然ハ此元先月廿四日出ヲ以、山形高田忠蔵殿渡り為替取組、金五拾両手形差下申候得者、近日相達御

承引可被成下与忝奉存候、尤当月晦日限無相違御引合御請取可被下候

一、自御地四月十三日出之手紙相達し、忝拜見仕候、然ハ東根早徳殿渡為替金手形入込宿、仍而山武殿へ御懸合之上、早徳殿へ人御遣申候所、何相不訳之儀、右御組合之衆へ御伺も被成候而、御見御用之儀不操合ゆへ不渡り之由、其段当地へ御案内申上候間、仕金御受取被下候様とも御手付、右為替手形御返し被下、扱々折角取極申為替右様不渡相成不都合之段、何共いかさま千万奉存候、尤右代金若又々為替等も取組申者無相違相渡申候方へ取組可申様、万一為替無御座候得ハ、正金指下可申段、御細書被成下夫々御尤ニ御座候、然ル所先便申上候通貴家様ハ御案内無御座候所、先方右之趣申参候而、早速右御引金山形表へ為替取組、委細ハ其セツ申上候間文略仕候

一、くり綿天草口付等御案内申上候趣、御承知被下忝奉存候、今後追而無事着受取可被下与奉存候

一、惣差引書委敷相認メ差下可申上候様被仰下御尤被存

候、則此度別紙差引書指下申候、尤差引殘金左之通

金式朱卜指引過上

銀式匁三厘也

六六一三 相庭書

右之通差引過上ケ様成申候間、御預金申返而御差引二相

加へ可申候間、此段宜承引被下候

一、紅花御出荷等本書いさゝ御願申上候、 何方さく

年者多分御座候荷ひかへ候へと可申上候、急度相働キ早

速御仕切可申上候、まつハ右之段申上度存候、早々如此

御座候、恐々謹言

五月十二日

近江屋

安治郎

源太

惣八

堀米四郎兵衛様

御店中様

相庭

一、筑前米 五十六匁三分

一、肥後米 五十八匁四分

一、中国米 五十七匁四分

一、加賀米 五十七匁三分

一、岡大豆 五十七匁五分

一、水あふら 式百三十匁

一、種白絞 式百八十三匁

一、荏油 三百拾匁

一、繰綿坂上

 五又仁百匁

一、 四又八九百匁

一、庄内米 四十六七匁

一、最上大豆 四十四五匁

一、同小豆 四十八匁

- 一、同荏料斗 六十匁位
- 一、同菜種斗 五十八匁
- 一、薩摩蠟 六メ八九百匁
- 一、長州同 五メ七百匁
- 一、鳴原同 六メ三四百匁
- 一、地晒同 壹匁四分五
- 一、土嶋白砂糖 九匁七分
- 一、太白同 七八匁十六七匁
- 一、御物黒同 斤 九匁七分五十五匁
- 一、六しま同 斤 九匁七分五十四匁
- 一、本大ワラ 廿七匁
- 一、金 六リ三毛八分五
- ぜに 八から九分 是る

五月十二日

近江屋安治郎

六七 書簡 (紅花代金にて古手買入に付)

(封書上書)
羽州最上谷地沢畑

堀米四郎兵衛様

近江屋安次郎

要用書

才三郎様御出立ニ付一筆啓上仕候、寒冷相増候処、弥以
其ノ地御家内様御揃、益御壮健ニ可被成候ニ付、珍重御
儀ニ被存候、隨而当店無異儀罷有候、乍憚安心思召可被
下候

一、差荷被登候や印紅花之儀才三郎様御相談ニ而、此度
御手合出来、則仕切書別紙ニ相認メ差上申候、尤仕切代
金之儀八十一月限ニいたし、尤右仕切金ヲ以木綿等ノ注
文之品、夫々壹麥払ヲ以差引可申候、其節右十一月と預
り金ニ而差引仕候而、過不足之儀ハ来春御案内可申上候

一、此度才三郎様も御添書被成候忝奉拝見候、然者来春古手類御注文金式百両分差下し可申様、右代金二而紅花も餘程御仕入御差向被下候段、御細書被成下御厚情之段、忝仕合二奉存候、然ル処近来古手類甚不引合二付、下店二而も過分仕入も困入申候、乍併貴家様御事御坐候ハ、御引合之通御取引仕度候得とも、何卒右御註文金高二半金春中に渡し可被成願上候、殘金新紅花目当二御差下し可仕候、委細之儀才三郎様御渡し申上候、宜敷御聞濟被成下候、註文被成下候て忝奉存候、御引合申候通御承知被成下候、来四日迄古手類積入可申上候、御勤弁之上早々御返言可被下候様奉願上候、其餘ハ右御同人様も何角御承引可被成候、まつハ取込早々如斯二御座候、恐惶謹言

近江屋

十月廿三日

安次郎④

源太

惣八

堀米四郎兵衛様

御店中様

六八 書簡（紅花仕切金利足に付）

別而啓上仕候、此度御手合出来候紅花仕切金十一月限御進上候所、日限後者来春諸品仕切書差上申候節迄、七朱利足御勘定申上候、此段左様思召可被下候、尤仕切差引不足金御取替相成候節ハ、壹割利足二而御勘定可被成下候、此段御頼申上候

近安次郎④

十月廿三日

堀米才三郎様

六九 書簡（紅花氣配並びに仕切書に付）

（端裏書）
「ヤサマ」

一筆啓上仕候、先以甚寒御座候所、其御地御家内様御揃

益御^(マツ) 聖康可被遊御座珍重御儀奉存候、次に当方無異罷
在申候、乍憚御休意可被成下候、

十二月十五日

近江屋佐助

一、爰元紅花氣配之儀、定メ而追々外々方も申参り御承

伊助

知被遊候半、元来当年ハ諸方荷物不足故、是まで何連一

喜助

花面白キ取引可在之存居候所、何分諸方不景氣ニ而、染

万助

注文も無之、紅屋方も夷以引合ニ相成不申候、一統仕事、

堀米四郎兵衛様

例年の半分位より致し不申、思惑買人無之、初メより少々

大場 三 吉様

もの商内ニ御座候、依而残花も又々相応ニ在之、今以売

御店衆中様

人ハ多分在之買人無数ニて扱々入り入居申候、迎も当時

引上ケ可申様子も相見へ不申候、何連来春諸方草生弥々

蔣付も不足等も相聞へ候得者、如何相成可申哉、難計奉

存候、何分諸方不景氣故中々引上ケ可申様子ハ相見へ不

七〇 覚 (請取書)

申候、御差荷も段々骨折相働キ、此度売捌キ申候、別紙

仕切書共相下し申上候、御一覽被遊可被下候、金子之儀

覚

ハ当晦日相下し申上候、此段御承引可被成下候、御地御

一、金拾両也

荷主様も追々御帰国可被遊御聞取被遊、又々外々方も申

内銀五百匁

参り候半、宜敷く御承引被成下候、先ハ右申上度如此御

七三一 此金七両三步式朱卜

座候、恐々謹言

三匁十九厘

さし引

金貳兩卜

四匁七分八厘

近安

才三郎殿

(大石田)
富樫久兵衛印

(文政五年)
午年七月十八日

沢畑

堀米四郎兵衛様

七一 覚 (紅花荷物蔵入書)

覚

国仕
一印 紅花 十八入
入 六箇

近佐殿行

金壹兩貳步也

送り状壹通

御出判壹通

右之通槌ニ受取申候、以上

七二 覚 (紅花荷物蔵入書)

覚

飛切
四丸 紅花
十七入

一、手板壹通

一、添金壹兩也

一、書判相添

伊勢屋理右工門殿行

司雨

貳丸 同

拾六入

一、手板志通

一、添金式歩也

一、書状老封

一、書判相添

近江屋安治郎殿行

同雨

貳丸 同

拾六入

一、手板志通

一、添金式分也

一、書判相添

同人殿行

合紅花八丸

手板三通

添金貳両

右之通御出荷被成下、忝健請取蔵入仕候、尤急船二積下可申候、以上

(大石田)

寺崎作右工門印

(文政九年)

戊七月十日

堀米四郎兵衛殿

七三 書簡 (代金支払延引取調べに付)

(端裏書)

一 堀米四郎兵衛様

一筆啓上仕候、先以甚寒御座候処、其御地御家内御揃益御勇健可被遊御座珍重奉賀候、佐而当方無恙罷過候、乍憚御安意思召可被下候、然者自先達御窺旁何角御願様子

柄も可申上候処、何分不都合之儀而已ニ而、乍不本意御無音申上候段、幾重ニも御高免被仰付被下候様奉希上候、定而夏以来及御聞も被成下候義、私義近来困窮居候而当惑、甚以困り入申候処、当春ニ至り如何体(マツ)(様カ)ニも致方無之、不勘定ニ及び無是悲借財之方江暫く相延シ、追々ニ入金請取被具候様ニ相頼ミ粗承知にも相成候処、六月中俄ニ願付ニ而、中井正次殿及御公辺当地御奉行所江被召出、手形之義ニ付何とも迷惑相成、品々取合申候内町分江御預ケ被仰付、漸々去月中旬ニ御上記相濟申候処、数月無商売ニ居、其上内證之破損旁以必死と手詰(途)り十方ニ暮居困り入申候処、御在京御荷主様方格別御憐愍を以、御渡し金之儀暫く御延引御用捨ニ被成下、先夕商売ニ取続キ可然思召、御厚情を以漸々商売方ニも立入り可申義ニ而、此度山形山田屋弥兵エ様を以、御国方之儀も御願ひ奉申上候仕合、何とも困命仕候義ニ御座候、此度別紙差引書之表、何卒右山形山田屋殿へ御勘定御渡し置候様、委細之儀者御同人方も御聞達被成下候様、誠ニ必死と難渋罷有候義、偏ニ御賢察被仰付宜敷御願奉申

上候、不存寄故障之儀共引出シ、御一統へ対し重々不屈之至りニ御座候へ共、幾重ニも御用捨、乍此上御引建させ被下候様ニ、呉々御厚志之段奉願上候、先者右御願旁早々如此御座候

恐惶謹言

(文政九年)
戌十二月

近江や熊次郎[㊦]

堀米四郎兵衛様

尊下

七四一一 覚 (紅花代金勘定に付)

覚

未秋差荷

一[㊦] 国 一、拾八入六丸 拾六袋

未十一月晦日切 四拾両替

代金七拾七兩貳朱也

同さし花貳袋

未十一月晦日切 參拾貳兩替

代金壹兩也

ノ 金七拾八兩貳朱也

内

金五拾兩也

未十二月四日御出しニ而下ル

同十二月廿七日嶋屋飛脚ヲ受取

又金貳拾兩也

申正月五日御出しニ而

山形佐治吉左衛門殿ヲ

申二月六日受取

此分十二月壹ケ月利足

御勘定無之相見江申候

殘金八兩貳朱也

申十二月五日大一極上ノ仕切

金入合五拾七兩貳朱ト三匁八分壹厘

綿勇殿方江受取

此分未十二月ヲ闕入申之

十一月迄ノ十三ケ月分

御勘定相見江不申候

尤右殘金之内ニ而手板不足

右七拾兩下し質御質銀

御引殘金江十三ケ月分

御勘定可被下候

右之趣西二月十二日出しニ而

(文政八年)

差登申候

伊勢屋利右衛門行

七四—二 書簡（紅花代金勘定に付）

伊勢利殿江手紙控

一筆啓上仕候、春暖之砌、弥其御地御家内様御勇健ニ可被遊御座、珍重之御儀ニ奉存候、随而当方無別条罷有申候、乍憚貴意思召可被下候、屋敷当地も二月十二日出しヲ以て委細申上候得者、定而相達し御披見御承知可被下与忝存候、且又此度其御地色々諸用向有之、松田源工門殿為差登申候所、依之先書申上候差引殘御利足別

〔利國〕
一十八袋入六丸拾六袋

未之十一月晦日切四拾兩替二而

代金七拾七兩貳朱也

同七十花貳袋也

未之十一月晦日切三拾貳兩かへ

代金壹兩也

二口ノ金七拾八兩貳朱也

内

金五拾兩也 未十二月四日御出し
同廿七日着也

又金貳拾兩也

申正月五日御出し

山形御領庄左衛門殿方

申二月六日着受取

此分十二月壹ヶ月之利足御勘定無之相見江申候

殘金八兩貳朱也

申十二月五日申新花代金舍

綿勇殿江相渡候

此分未十二月も閏入申之十一月迄ノ十三ヶ月分利足御

勘定相見江不申候

右之通御勘定被成下、則源工門殿ニ御渡し可被下候、何

様右申上置候、急札如此御座候

恐惶謹言

三月二十七日

堀米四郎兵衛

印

伊勢屋利右衛門様

同 御店中様

七五 書簡 (沢雨紅花又為替取組みに付)

(端裏書)
二やサマ 戌ノ十二月廿二日遣し書状
亥ノ正月二日着

一筆啓上仕候、及日廻嚴寒ニ御座候得共、先以其御地御家内様御揃益御勇健可被遊御座与珍重之御儀与奉存候、随而当地無異儀罷有候、乍憚貴意易思召可被申候

一、爰元々十二月廿四日出を以_レ印紅花之儀委細申上候得ハ、定而順達御披見可被下与奉存候

一、自御地十一月十九日出貴札九、一日忝拜見仕候、然ハ爰元々九月十七日、十月十一日出、順達夫々御披見被下候由忝存候、然ル処兼而色々申上候_レ沢雨紅花之儀、酒田押判屋四郎平殿_と阿州宮嶋萬屋治兵衛殿又為替取組、

則送り手板絵花板とも萬屋次兵衛殿名前ニ而参り、勿論御同人御出坂被成候間、貴家様_と被仰候之趣掛合申候処、酒田押判屋_と手前為替取組、則手板絵符板迄も手前荷替ニ而差向候儀ニご座候得ハ、売代金之儀ハ不残手前へ相渡し可申候、万一彼是いたし候得ハ荷物相渡し可申候様被仰聞、勿論酒田押判屋四郎平殿請取書も御持参被成候ゆへ、右代金不残御同人へ相渡し、則右之趣貴家様へ御案内申上候儀ニ御座候、然ル処此度之御書状之趣ニ而ハ貴家様分押判屋へ御かし金もご座候由、其上ケ様之取計押判屋不筋之趣被仰被下候、御尤丈ニ御座候得とも、左様内表合訳ハ存不申候、送手板絵符板とも萬屋治兵衛殿名前ニ御座候間、下店ハ手板捌之事ゆへ断し申様ハ無御座候、無抜御同人へ相渡し一向御気毒ニ奉存候得共、右□□宜御承知可被下候、尚貴家様_とハ押判屋御掛合可被下候

一、当地紅花相返候儀、同様不景氣こまり入申候、尚又別紙難相返入御覽申候間、御勤考被下御引合候品何成共御差向被下様奉願上候、無如才相納御座候内可申上候へ

くんハ、右其詔□申上候、最早年内余日無御座候得者、

来春日出度萬々可申上候之条取込早々如此御座候、恐惶

得意

三月廿九日

近江屋

安治郎印

平八

次兵衛

堀米四郎兵衛様

御店中様

貴下

七六 書簡 (紅花絵符・送手板に付)

(封書上書)

羽州最上

堀米四郎兵衛様分大坂

急用書

江戸六日限

(封書裏書)

一四月廿八日出近江屋

安次郎

一筆啓上仕候、向暖之砌ニ御座候得共、先以其御地御家内様御揃益々御勇勝可被遊御座珍重之御儀ニ奉存候、随而当地無異儀罷有候、乍憚貴意易思召可被下候

一、從其御地二月十三日出貴札相達し忝拜見仕候わんハ、兼而御尋被下候ニ沢雨紅花之儀絵符板送手板とも阿州宮嶋萬屋治兵衛殿名前ニ而参り申候間、売代金御同人へ相渡申候段御案内申上候処、御尤に思召され、左候得ハ酒田押半屋へ御掛合被成、仍而送手板絵符板等写し差上可申被仰下承知仕候、則絵符板ハ沢雨十六入荷也、阿州宮じま萬屋治兵衛といたし裏ニ堀米四郎兵衛出しと遣し有之、尚亦送手板ハ沢雨十六入四丸是亦荷主阿州宮じま萬屋治兵衛と入申し、勿論印形いたし、尤此も裏之

はし二堀米四郎兵衛出しと相印、印形へも何二も無御印候、仕切之儀ハ三拾七両式歩かへ相仕切、則旧冬御同人江代金相渡申候、右之通御座候宜御承知可被成候、尤早速返書可被成候処取込罷有少々延引仕候段御免可被成候一、当地紅花様子近々外々に方も及御聞可被成候通兎角不印を以鬚直立不申扱々困入申候欵、其後新花草生模様次第高下可仕候、例年御仕入御荷物多少二不依御さし向被下度可然申上候、格別相励御仕切可被成候、且別紙諸相庭入御覽申候間、御入手被下御引合之品も有之者、御差向被下度、偏奉願候、先ハ右之段貴報申上候、取込早々如此申候、恐々謹言

四月廿八日

近江屋

安次郎印

平八

源兵三

堀米四郎兵衛様

御店中様

貴下

七七 書簡(上京御尋に付)

一筆啓上仕候、向暑ニ御座候得共、先以其御地弥々安康ニ御上景被遊候御事哉大慶御儀ニ奉存候、此間南都増井清兵衛殿御状申被遣承知仕候、御同人此間兵庫表へ御越被成候間、近日御帰りに被申出候ハハ、御渡し可被下候、若哉此方御立寄も無之候ハハ、南都御送り可申上候一、尊(マツ)て様先年御上坂、下店江も御主人来被成下大慶仕候、此度商用ニ而御上京被成候哉承度候、尚亦堀米四郎兵衛様方いづれも御壯健被成候哉御尋申上候、御同人紅花も昨年中大場三吉様御上京之□□御片付被遊候哉ニ存候、若亦可被為登も御座候ハハ御手人江可被申候、御承知いたし可申候、まつハ右之段、乍序手御尋申上度一言如此ニ御座候、恐惶謹言

近江屋安次郎印

五月十八日

伊八

松田源右エ門様

貴下

七八 書簡 (為替金持参に付)

(封書上書)
〔谷地沢畑

山形

堀米四郎兵衛様

高田弓太郎

金五拾両添要用

(封書裏書)

〔谷地沢畑

山形

堀米四郎兵衛様

高田弓太郎

金五拾両添賣下

態々手代勘助差遣し候条、一筆啓上仕候、追日酷暑之砌、先以其御地御全家様御揃益御壯健ニ可被為入大悦ニ奉存上候、随而下店無異御安意思召可被申候、此間者遠路之

所大勞之節初而御入幸被下候得とも、折節取込何之風情も不申上今更奉恐入候、其節御約束被成候通判

一、金五拾両也

但し大坂近安殿為替
手形引替

右之通為持奉差上候、御改御入手被遊下候、奉願上候、

尤近安殿清主手形江貴家様御受取裏書被成下、此者江御

渡し可被下候、今日ニ一斉状日ニ御届候ハハ、此趣大坂

表江申達し候間、何とぞ貴家様よりも請拂相濟之趣意御

申通し被下候様奉願上候

一、其節被仰受候てん草上之義、此節当地相庭直段ニ而受

拂被仰付候ハハ随分相働御世話可申上候間、否や此者御

左右被仰受可被下候奉願上候

一、其節も御伺申上候、向後為替之義、御勝手合ニ相成

候ハハ、御互永かく御取引仕度存候、御勘考被下以来御

取引之義御伺迄、重々先者先口御龜末之取計申上候、御

申訳旁乍略用以書中如斯ニ御座候、余者使勘助口上ニ而

可申上候間宜敷御承引被遊可申候、恐惶謹言

六月三日

高田忠 ㊦

弓太郎

堀米四郎兵衛様

参人々御中

七九 書簡 (紅花仕切差引書に付)

(端裏書)

「や」

一筆啓上仕候、追日暖氣相募り申候処、其御地御令家様御揃益御勇健ニ可被遊候由珍重之御儀ニ奉存候、隨而当方無異儀罷有申候、乍憚御休意可被下候

一、御印様紅花之儀、先書壳付申上候儀ハ相達御承引可被下与奉遠察候、此度仕切差引書奉入御覽候、御引合被遊可被下候、若相達も御座候ハハ御序被仰遣可被下候、尚又差引表不足金少々相立申候而御氣之毒ニ奉仕存候、追而為替ニ御願被申上候間、御執置被遊可被下候

一、当地紅花之儀、先書後、差而相替儀も無御座候処、

五月十三日出ニ照込候様子相聞候故、一統氣配持候得とも、紅屋方ハ最早暑氣ニ罷成候故仕業も相休候時節之間、直上ケ買人も無御座候ゆへ持合居申候、此後御地出来模様ニて高下不仕候、何卒景氣相直り賑々敷商事出来候様、夫而已願居申候

一、御印様当年も多分御仕入被遊候、壳付延引仕御願申上候も乍恐入候得共、口入合ニ急度出情可仕候間、不相替宜ク御荷物より不限多少御出荷被成下御支配被仰付被下候様奉願上候、先ハ右之段申上度如斯御座候、尚追々便なと申上候、恐惶謹言

市村屋

六月四日

弥三郎 ㊦

吉兵衛

堀米四郎兵衛様

参人々御中

八〇 諸品控帳 (横帳)

(表紙)

「諸品ひかえ帳」

壱ばんたんす引出し

象牙時絵

一 嶋天鷲絨女の帯地

二ノ引出内ニ 市松の入帯一ふさ

五番之内ニきせるたはこ入

ぞうげくし一

まきへくし二ツ

きんのさしこみ二ツ

同 よふじ二

壱番引出し

取合

一、銀のかんさし 九本

一、銀きせる 三本

一、たはこ入 五ツ取合

一、同 さし 一ツ

一、守袋 壱ツ

一、へつこうこうかへ 二本

一、同 かんさし 四本

一、同 かへほふ 壱本

一、同 くし 三枚

一、ぞうげのくし 壱ツ

一、まき糸のこくし 二ツ

一、きんのさしこみ 二ツ

又外ニ 二ツ

一、同 ようしさし 二ツ

一、紙入 壱ツ

一、麻のあせふき 二ツ

一、硯箱 壱ツ

一、扇 三本

一、はし箱 壱本

一、かね付 壱ツ

一、小はこ取合 四ツ

一、小そ代く 五ツ

一、はし 二ぜん

一、縮縮めん小切色に

はり小こうかへ

一、ようじさし 壱ツ

一、守巾着 二ツ

一、縮色々小切 二包

一、綿ほふし 一ツ

一、縮表染返し 壱反

一、ひろーと半えり 二ツ

一、嶋男帯地 一筋

二番

一、ちゝふ縮式反半

一、紫縮面帯 一ツ

一、糸織帯 一ツ

一、緋縮緬帯 一ツ

一、非縮緬(マ)ヨシ帯 一ツ

一、浅黄 同 壱ツ

一、萌黄紋縮緬帯 一ツ

一、御納戸男古帯地 一ツ

一、糸織帯女片わわ

一、紫形付小切 二ツ

一、天鷲絨嶋腰シメ帯地 一ツ

一、白綸子腰シメ帯 壱ツ

一、白紋縮緬同 壱ツ

一、紅緋 半反

一、はかた古男帯地 一ツ

一、綿ほふし 二ツ

一、上ケ綿ほふし 二ツ

三番

一、黒天鷲絨帯

壹本

一、唐槭風呂敷

壹枚

一、茶 子帯

壹筋

一、糸織じま綿入

壹ツ

一、龍門小紋綿入

壹ツ

一、糸織格子嶋袷

壹ツ

一、黒羽二重綿入

壹ツ

一、縮緬古裏表

貳敷

一、白紋羽せんひ

壹ツ

一、縮端切色々

壹包

一、単形付縮

壹反

一、嶋糸織

壹反

一、紅縮切

壹包

一、同

半反

四番

一、ようふん縮緬わた入 壹ツ

一、紋縮めん敷綿入

壹ツ

一、紫同 綿入

壹ツ

一、河色紋付わた入

一ツ

一、狐紋わた入

一ツ

一、縮羽縫胴着

一ツ

一、紫同 胴着

一ツ

一、唐御納戸紋付わた入 一ツ

一、紋付帷子

壹枚

一、単形付単物

壹枚

五番

一、まわた

一包

一、緋かこの縮緬表もの一ツ

一、しま風呂敷

壹ツ

一、黒唐孺子女帯地

壹本

一、羽縫縮面下着

壹ツ

一、紫せなか当

壹ツ

一、白緋はた着 一ツ

一、嶋縮緬女帯 沓筋

一、染じま紋付わた入 沓ツ

一、しま風呂敷 一ツ

ズ

管入一ばん 小ふとん立しま
形付敷ふとん

二

一、茶格子裕 沓ツ

一、茶立しま綿入 沓ツ

一、茶青梅わた入 一ツ

一、茶見甚わた入 一ツ

一、茶しま太織同 一ツ

一、茶弁慶 同 一ツ

一、結城しまわた入 一ツ

一、茶格子わた入 一ツ

一、形付小紋裕 沓ツ

一、青茶小紋裕 沓ツ

ズ

三

一、茶格子裕 沓ツ

一、同 裕 沓ツ

一、茶弁慶裕 沓ツ

一、茶格子わた入 一ツ

一、茶さび格子綿入 一ツ

一、立しま単物 沓枚

一、単じま単物 沓枚

一、納戸紋付わた入 沓ツ

一、しま紬綿入 沓ツ

ズ

四

一、白輪帷子 沓枚

一、立しま輪同 沓枚

一、帛しまかたひら 沓枚

一、紺しま 同 沓枚

一、白帷子 沓枚

一、萌黄格子ゆかた 壹枚
 一、ちゝら青梅単物 壹枚
 一、単かさりう帷子 壹枚
 一、格子しま帷子 壹枚
 一、白むく小袖 二ツ
 一、紫縮緬敷綿入 壹ツ
 一、紫縮緬振袖 壹ツ
 一、萌黄綸子女帯 壹筋
 一、振袖中綿 一
 一、丸わたほふし 一
 一、染しま袷 壹ツ
 一、格子しまわた入 壹ツ
 一、替しま袷半天 壹ツ
 一、嶋縮緬単物 壹枚
 桑入之内 小内たん二十二之手袋
 枕二ツ かやほろかや
 一、古とき波色々 壹枚

一、古格子わた入 壹ツ
 一、白ゆまき 壹ツ
 一、縮ときまき 壹統(つと)
 一、白足袋 壹足
 一、もんべ 壹足
 一、単くつし単物 壹枚
 一、黒昼夜女帯 壹筋
 一、染しま袷 壹ツ
 一、青梅しま御袷 壹ツ
 一、草染しま袷 壹ツ
 一、紺かすり帷子 壹枚
 一、浅き下帷子 壹枚
 一、縮綿たはぬへはた着壹枚 壹枚
 一、地白形付単物 壹枚
 一、色々羽縫下帷子 壹枚
 一、黒袖口古とめ色 壹枚
 一、志ほり一重ひしわ 壹枚
 一、龍つ小紋単羽織とき帷一

- 一、黒縮面手ほそ 老ッ
- 一、紺豆絞り単物 老枚
- 一、生八丈の帯地
- 一、緋色々羽縫下着 老ッ
- 一、岸しま裕 老ッ
- 一、単小柳古切 一
- 一、納戸古合羽 一
- 一、単小紋わた入 一ッ
- 一、茶染しま裕 老ッ
- 一、単染しま裕 老ッ
- 一、茶弁慶裾綿入 一
- 一、かかミ 二面
- 一、セつた 老足
- 一、日より下駄 老足
- 一、小こふり 一ッ
- 一、日かさ 老本
- 一、雨かさ 老本

- 一、布こた入 一ッ
- 一、よろしこし 一門
- 一、江戸糸 三枚
- 柳桑打入
- 一、小夜着 一
- 一、枕ふとん 一
- 一、ゆたん包 二
- 一、夜具 二ッゆたん
- 一、金六拾両也

×金六拾両ニ

式百拾四之品也

一筆啓上仕候、大暑之砌ニ御座候得共、御家内様益御勇健被遊御座珍重之御義ニ奉存候、随而当方無異罷有候条、

乍憚貴意易思召可被下候、然者兼而及御語置候姉様御口
願並御手道具今般送り差上候間、御改御請取被下度奉存
候、先達而中箆箭之鍵不見当趣申上候所、其後出来候二
付、則別紙品書付相記し為持上候間、御高覽之上御引合
御請取可被下候、尤親類縁者迄立会取調封印いたし呉候
得共、若見落し候品も有之候ハハ、被仰聞可被下候、且
差添候幸料共江御請取書被下度奉願上候、先ハ時候御伺
旁得貴意度如此ニ御座候、恐惶謹言

六月七日

堀米直藏

佐藤傳兵衛

高橋六右エ門様

参人々御中

追手寺拂差上候間御請取可被下候、且先達而差上候村
拂並寺拂共御請書此もの江御渡被遣被下候様願申上候

八一 書簡（紅花荷物大石田藏入に付）

〔封書上書〕

〔沢畑〕

大石田

堀米四郎兵衛様

久兵衛

貴下

〔御才料様御帰り二付、一筆啓上仕候、残暑之砌御座候得
共、御家内様益御勇健ニ被遊御座珍重之御儀ニ奉仕存候、
然ハ此度御印御荷物御差向被成下雖有仕合ニ奉存候、右
御礼申上候一当所江紅花荷物出高之儀式百六拾駄仁三郎
舟頭迄積入相成候、跡当所藏入も御座候間、凡三百駄御
座候、猶追々様子申上候間、先ッ者前文御礼旁々早々申
上候、恐惶謹言

大石田

七月十八日

久兵衛

堀米四郎兵衛様

八二 紅花送り状

一、百拾五文

六田方榎岡迄

八月五日

紅花三

問屋 ①

一、百貳拾九文

たて岡方土生田迄

八月五日

三肥分

問屋 ①

一、百廿五文

三丸

袋まし共

土生田方

大石田迄

以上

源助 ①

八三 覚(蠟請取書)

一、蠟 覚

六舟

目方三拾四又百五十匁

右之通清兵衛方蠟請取申候、以上

八月七日

油屋

伴蔵 ①

沢畑

四郎兵衛殿

八四 青芋四駄請取手形

布宮七蔵殿

(包紙上書)

「青芋四駄請取手形

大石田との」

堀米四郎兵衛殿分

天 一八丸 百廿四肥入
夕 白干亭

一、添金式両式歩

一、手板巻通

一、通り判巻通

一、添状式通

右之通り髓ニ請取蔵入行候、為念如此御座候、以上

辰

設楽治郎右衛門 ㊦

八月廿七日

天神ゆの沢

八五 覚 (着物地等仕切)

覚

丑十月廿四日

一、百三十五文

半衿式ツ

同十一月九日

一、巻メ百十五文

つむぎ切巻丈
御内様分

一、金巻分ト四メ式百文

子之年木綿切品々取合
あね殿分之帯出表

丑十月廿一日

一、金巻分ト百文

古小袖綿入巻ツ

丑二月廿五日

一、式百三十文

白九文足袋巻足

三月朔日
一百七十文

ちりめん半袴巻ッ

あね殿分

外二

金巻両式分ト八貫七百五十三文

金巻分也

代百文

丑五月十七日
一、金三分之内式百文

仙台平野袴巻ッ

米式俵也

年貢也

返り

但苗代也

同
一、巻メ九百文

馬のり袴巻ッ

代金巻兩ト五百文

錢四百五十文

またい仕立ちん

亥八月十九日
一、九十文

入衿さらし式尺

並白きめ代共

同八月廿日
一、七百三拾五文

入衿さらし巻丈五尺

合金式兩式分ト九メ七百三十文

此金巻兩式分ト五百廿四文

笠を巻ッ

合金四兩ト五百廿三文

右之通ニ御座候

此表相濟申候

寅三月十九日
一、三十八文

花染切巻尺

八月十日

与藏

同同日
一、式百四拾文

くろ切四尺

堀米四郎兵衛様

小以

八六一一 覚 (諸品勘定)

正月十八日

近江屋林兵衛 ㊦

沢畑之

堀米四郎兵衛様

覚

一、六拾四匁

本紬(マユ)しま巻反

一、五拾八匁五分

同 巻反

一、五拾九匁

相見甚 巻反

一、四拾七匁

中紅きぬ巻疋

一、貳拾三匁五分

花口きぬ巻反

一、七拾五匁

縮面かが下着巻ツ

一、三拾九匁五分

□□風合羽十八間仕立上り

ノ三百六拾貳匁五分

為金六兩ト貳百六拾五文

外二

金貳歩申請 内貳百拾四文ハ返上

右金六兩貳分貳朱也、已上

七百四拾九文御返し

右之通売却此金髓奉受取り申候、以上

八六一二 覚 (売上代金受取)

覚

一、木綿十八間風合羽巻ツ

右之通売上代金髓ニ受取申候処、尤仕立出来之砌、此

書付引替ニ右品御渡し差上可申上候、以上

卯

正月十日

近江屋

林兵衛 ㊦

堀米四郎兵衛様

御内

八六一三 覚 (仕立賃金請取)

内 金三分十二月廿一日武助殿より受取

引残

金三朱ト八百廿六文

覚 京都より当地迄金壹兩ニ付銀四匁五分五毛

一、金壹兩貳歩ト八拾文 綿屋勇藏殿より金四百貳拾五兩

割合届

十二月十一日
一、六百廿八文 酒肴代割合
同 一、六百文 丁字代

右為割合仕立届賃銀隨ニ請取申上候、以上

亥

十月十九日 福島屋 印

堀米四郎兵衛様

引残り

金三兩也 酉年分利金

式兩壹分を朱ト三百四拾六文

右之通差引勘定仕候間、御改御差引可被下候

戌正月七日

善藏

八六一四 覚 (差引勘定)

覚

四郎兵衛様

一、金三分三朱ト五拾六文

此利七百七拾文

八六一五 覚(代金受取、入帳依頼)

覚

一、銀拾五匁

大極上々

熊胆正ニ三分

一、同拾六匁五分

雲丹取合 百五拾匁

ノ銀三拾壹匁五分

右之通ニ御座候間、宜御入帳可被下候、已上

丑十月廿五日

天佐藤 印

沢

御両親様

八六一六 覚(賄代調書)

覚

九月廿九日晚

一、貳

九月晦日昼晚

一、四

十月一日 昼

一、貳

同、廿八日

一、老

ノ九ツ

代七百廿文

右之通御座候、以上

柴はし

十月廿八日

孫七

沢畑村

四郎兵衛様

申十月十八日相済帰ル

四郎兵衛様
市郎兵衛様

同
同

四郎兵衛様

八七 書簡(差引勘定に付)

(封書上書)
堀米四郎兵衛様 丸屋次右エ門

用事

くわん計ニ相成咄々御取込候事与奉察上候、然ハ一昨日
申上候通り、当夏私引請仕候当年濟之分、左之通元利共
差遣し候間、御改御受取可被下候、則差引左ニ申上候

覚

金高三拾五兩貳分之内
一、金拾五兩貳分

当年濟之分

此り壹兩壹分

六匁三分七厘貳毛

〆拾六兩三分

六匁三分七厘貳毛

内

拾四匁 紅花御運上分

残り拾六兩貳分

七匁三分七厘貳毛

右之通差上申候間、御受取被成下度奉存候、尤紅花御運
上之分、差引致差上申候儀如何敷御座候へ共、先日御役
所へ立替候上助仕候間、則差引ニ相立申候、右惣而思召
被申候、余ハ拝顔可申上候、以上

大卅日

八八 紅花仕切

(包紙上書)
一、文政五年

仕切書一通

午ノ十一月吉日

最上谷地

吉田村

奥山才三郎

一、いか拾三れん

代

一、数のこ 式升

代

封印 ④ 最上沢畑村

荷主 堀米四郎兵衛 ④

一、からかい 四懸ケ

代

一^や国 拾八入 四丸

一、蠟燭台 拾丁

代 表メ文

拾七入 壹丸

〆 壹駄壹丸 九袋也

京都

外二

伊勢屋利右衛門殿行

酒田に大久保迄運賃ハ貳百五十文濟、此分利左工門方

二而拂置、右之通り御座候、以上

聞

四月十八日

八九一 覚 (諸品勘定)

覚

戌九月廿二日

八九—二 覚（戌亥年分勘定相濟）

覚

一、十式貫五百文 去戌年百廿五分

一、金巻分式朱 色々代

巻メ七百四拾文

外二
一、式貫文 当亥春四ツ分

ノ金五兩式分式朱

四百六拾文

右之通去戌春当亥春兩年分不殘相濟、此表出入無御座候、
以上

亥四月廿四日

四郎兵衛様

酒田工町

七兵衛

正筆

印

九〇 書簡（注文品代金・紅花値段に付）

嶋屋飛脚ヲ以一筆啓上仕候、秋暑退兼候得共御全家御揃
一統御壯健ニ可被遊御座珍重ニ奉存候、当方無異儀罷在
候、乍憚御安意可被下候、然者七月十七日出御印御売附
申上代金之内四拾四兩差下申候、相庭（ま）ヲ受取可被下奉存
候、其節十右衛門様江の渡し金相断候而御地も早々御差
凶御状御上可被下候様申上候処、其後右十右衛門様度々
御出被成、国元も返事有之候迄相待候義何分込り入候而
難渋仕候段、再応被仰聞、私方推察仕何共氣之毒仕候、
仍之当地にて考弁仕、右重右衛様御買物左二

一、佛壇 式固

一、小間物入 巻固

ノ凡代金拾兩斗之由被仰聞候

右荷物引取金七兩式歩相渡申候、仍之右荷物や印にて大
津も敦賀へ向貴家様へ差引候間、御馳走之上荷物津替金

七両式歩御引取可被下候、則荷為替之振合ニ仕候而為替
手形別紙差下申候、可然御取計可被成下候

一、御印仕切状 別紙相認メ差下申候

御引合可被下候則差引殘金左二

金四両三分五朱

×山形西屋清兵衛殿と御受取可被下候、山形と大貢

御拂可被下候

右之通差下申候、御受取可被成下候、右ニて皆済と相成

申候、左様思召可被下候

一、当地紅花之儀、干今思染方寤々始り不申候、追々新

花も上り込候得者何卒此後追々賑敷取引出来候様願居候、

尚又不相替新花御出荷被成下候様奉願上候、先者右之段

申上度、如此御座候、尚期重便之時候、恐惶謹言

八月四日

伊勢屋源助 印

金七

彦七

堀米四郎兵衛様

貴下

九一 書簡(年賀・紅花相場に付)

(封書上書)

「最上沢畑

一月九日

(封書裏書)

堀米四郎兵衛様 從西都

竹岡理右衛門」

参る人々御中

新春之御吉慶不可有尽期重畳目出度申納候、先以其御地

御家内中様、揃倍御勇健被遊御追歳、珍重之儀奉存上候、

次ニ当方無異儀加年仕候間、乍憚御安意思召可被下候、

先者右年始之御祝詞申上度如斯御座候、尚期永日之時候、

恐々謹言

正月八日

竹岡理右衛門

堀米四郎兵衛様

六奴九分三厘

右之通御任せ荷物売捌キ、代金不残当月晦日限相下し
可申、此表無出入相済申候、万一箇荷物之内抜御取違
在、亦ハ御算用違等有之候ハ、重而御指引可仕候、
為後日之依而如件。

文政十一戊子

十二月七日

近江屋佐助 ㊦

堀米四郎兵衛殿

尚々不日御仕入御荷物支配とも御用向被御付可被下候、

吳々モ奉御願上候、已上

新春之御吉慶無休期重畳目出度申納候、先以其御地御家
内様御揃、益々御勇健可被遊御越年珍重之義奉存候、次
ニ当方無異加年仕候間、乍憚御休易思召可被下候、尚々
右年頭之御祝詞申上度如斯御座候、期尚永日之時候、恐
惶謹言

正月五日

近江屋佐助 ㊦

伊助

喜助

万助

九三 書簡 (紅花相場に付)

(封書上書)

「羽州最上谷地沢畑

堀米四郎兵衛様

要用」

(封書裏書)

「極月口日

近江屋佐助

」

堀米四郎兵衛様

参り人々御中

相場

奥仙

六十四五兩
五十八九兩
五十四五兩

南仙

六十四五兩
五十八九兩
五十四五兩

早場

六十四五兩
五十八九兩
五十二三兩

水戸

右同断

最上

六十兩前後
五十四五兩
四十四五兩

残荷高凡

六百駄余

右之通二御座候、以上